
ことのほ

誉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ことのは

【Nコード】

N0669Y

【作者名】

誉

【あらすじ】

自分以外の人の外傷や病気を自身に移し変えて治癒するという特殊能力を持っている私、姫宮柚。気づいたら深い森の中でした。

ここは一体どこでしょうか？

チキンで無駄にビクビクしてる主人公とそんな主人公を影ながら守ってくれる騎士様との恋愛もの、になる予定です。

これはどうでしょう？（前書き）

R15はとりあえずのものです。初めての投稿なので拙い文章ですが、お付き合いくださると嬉しいです。

はいはどうでしょう？

私、ひめみやゆず姫宮柚には不思議な能力がある。

自分以外の人の外傷や病気を自身に移し変えて治癒する、という私にとってはあるがたくない能力だ。

その能力のせいで家族にも気味悪がられて遠ざけられる始末。私に注がれるはずだった家族からの愛情はすべて2つ下の妹の桜さくらにいつてしまっている。

そんな妹も私には常に冷ややかな視線を向けていた。

つまりは、私は家族の中でどこにも居場所がないという事。

そんな私の今の現状は…。

目の前、緑が生い茂る森の中。ここはどこ、状態。

意識がなくなつて気がつくところにいるんだろう？

意識がなくなる前の事を思い出そうとして…止めた。

あんな悪夢は考えたくない。それよりも今は目の前の状況をどうにかするべきだね。

なんとか自分を奮い立たせてとりあえず辺りを見回してみた。先が見えない深い森の中だという事が分かる。

なんでここにいるかは不明。ここがどこなのかも…不明。まさか誰かに連れ去られて置き去りにされた、という事は…ない、よ、ね？ いやいや、まさか。私を誘拐したとしても相手に得な事は一つもないはず。ないない。その仮説はありえない。

こんな所で運良く人が通りかかるなんて都合が良い事ももちろんない…よねえ。

でも大声で叫んで誰か近くに人がいるかどうか確認する勇気のないチキンな私は、いつまでもその場を動くことが出来ない。

こんな時引っ込み思案な私は自分が何をしたら一番良いのかが分からない。

仕方なく、近くのもたれやすそうな木に寄りかかって大きくため息一つ。

でもそれで状況が良い方向に変わるわけもなく、私はこのまましばらく呆然と立ち尽くすだけだった。

「あー…もうどうしょ…」

そのままの状態で結局1時間くらい経ってしまった事に自己嫌悪。名前の分からない鳥だと思われる鳴き声も遠くで何度も聞いて、聞くとびにビクビクしながら周りを見回して。特に何も変わらない森を眺めてホッとして短く息を吐く。そんな繰り返し私。

動かなくても何も変わらないのなら、もう自分から動いてこの状況を抜け出すしかないのは分かっているんだけど…。

いつもそうなのだ、私は。自分から動く事よりも先に周りの人が動くのを待っていて、それに合わせて自分も動くこうとする…クセって

いうのかな？

こうして一人しかない時でも誰かが来るんじゃないかとかいろいろと考えて結局動かない。

「お姉ちゃんのそういう所がムカツク」とはよく妹が言っていた。先に行動したらしたで「ナマイキ」だと言われていたけれど。姉なのに妹にナマイキ呼ばわりされるって…な、情けない。

ああ、余計な事をまた考えてしまった。

とりあえず、このワケ分からない森から抜け出す方法をいい加減考えないと。

方向を決めて歩いて行ってみるしかないか。

よく森の中で遭難したら助けが来るまで下手に動かない方がいいとか聞くけど、今のこの状況は動かなかったら一生助けが来ないような気がする。

手ぶらな私は携帯も今は持っていない。もっとも携帯があってもこんな深い森の中では圏外だろうけど。

…あの家族が私の為に搜索願を出してくれるとも思えないし。

覚悟を決めて私は直感でこっちに行ってみよう、と右手に広がる生い茂った木々を見ながら震える一步を踏み出した。

どうか呆れないで欲しい。それでも私には勇気の一步なんだ。

情けなくも足の震えが止まらない。

立ってただけで動かなかったのに震えだけは一向に収まらない。ゆっくりと歩き出した時も震えは変わらず収まらない。この臆病さはきっとこれから治らないんだろう、な。

それにしても一体ここはどこなんだろうか。

少し歩いて思っただけで、見たことの無い葉の形をした大木や草や

花などがたくさんある。

星の形をした葉とか、なんだこれ。私は今どこにいるんだろう。

上を見上げればまだ陽は高い位置にいて明るいけど、これが暗くなってしまうたらどうしよう。

その時にまだこんな森の中をさ迷っていたら本当にどうしよう。

泣きそうになりながらも今になって必死に足だけを動かそうとする私。考えたら今のこの状況がとても怖い事だという事に今更ながらに気づいた。気づいてしまった。

後ろ向きな考えばかりが頭をよぎる。もっと明るい事を思いながら進もうとしても、どこまでもネガティブ志向な私は結局「歩いてても森から抜け出せなかったらどうしよう」という暗い思いを振り払えなかったりした。

抜け出せても家に自力で帰れる距離なんだろうか。お金は今の私は持っていない。本当に気づいたらこの身一つでここにいたのだから。

歩きやすいスニーカーを履いていたのは助かった。ブーツとか、パンプスとかだったらこの森の中をこうも歩く自信がなかったから。長袖のシャツに黒の長ズボン。それが今の私の服装。すごく地味な格好だけどいつものスタイルだ。

20歳の私はイマドキのオシャレというものにあまり興味がなかった。なるべく目立たないように地味な格好をよくしてひっそりとしてきた。

別にそれに対して不満もない。オシャレをして周りの反応を見るのが正直怖かったから。

「…あ」

今、どこから声のようなものが聞こえてきたような気がする。

歩いてから結構経ったけど、相変わらずの森。景色の変化が見られないこんなところで私の他にも人がいるかもしれない事にちよつとだけ安心する。

一人よりも二人の方が心強いし、もしかしたらここから出られる道を知っているかもしれない。

：最悪、私と同じ立場で迷ってる人かもしれないけれど。

とにかく、なんとか合流してみた方が今の状況を打開出来るかもしれない。声が聞こえた方に行ってみよう。

：コッソリと。だ、だってやっぱり最初は怖いし。どんな人かも分からないし。

チキンでごめんなさい…!!

声が聞こえたという事は、よく考えたら一人ではないかもしれないな。

話し声っぽかったし。もう一人いるのかも。

ゆっくりと声のした方に歩いていくと、だんだんと話す内容も聞こえてきた。

どうやら男性2人と女性のようなだ。

「…っ離して！離してよっ家に帰して！」

「おいおいお嬢様。いい加減諦めろよ。こんな所では誰も助けに来ねえよ」

ガハハハ、と下品な笑い声が響く。

チラッと見えた状況では二人の男に女性が拘束されて無理やり歩かされている所だった。

：えっと、これってどうすれば。

ここはどこでしょう？（後書き）

更新速度はゆっくり亀ペースだと思われます。すみません；

このような投稿は初なので拙い文章で申し訳ないです；物語は王道な設定ばかりだけどやっぱり好きな展開なので自由に書いていきます。

続きも頑張って書きます。

いきなりピンチ…です。

男性2人に女性一人。

どう見ても男の方は良い人ふうには見えない。女性は手を拘束されて無理やり連れられてるみたいだし。

この状況で果たして声なんて掛けられるだろうか。否、出来ない。

むしろ危険が迫ったような気がする。

私に気づいたらもっとややこしくなると思う。

そうかといってこのまま無視するのも女性が気の毒だ。私に何が出るってわけでもないけれど。

それと気になったのはそれとは別の事。

服装が全然違う。

男性の方は2人とも軽鎧っていうのかな。何か胸当てのようなものをしていて、腰には剣だと思われるものをさげている。

女性はヒラヒラとドレスのような服を着ていてパツと見てどこかの童話の中のお姫様のような服装だ。

現代にどこにでもいるような服装ではない。両方とも。

「…どうなってるの」

半ば呆然と木の陰から三人の男女の様子を伺う。髪の色も女性は金髪フワフワロングだし、男1は灰色がかった赤の髪で男2は茶髪。

男の方はまあ珍しくもないかもしれないけど、腰に付けてる物や身につけてる物が普通と違う。

どこかのファンタジーにでも飛び込んだみたい。

「もういやあっ！」

「ちっ：おい、大人しくしろよ」

ズルズルと引きずるようにして歩いていた女性が堪らずに声を上げる。

バタバタと暴れている女性を面倒そうに強引に連れて行こうとする男たち。

そして腰にさげていた剣を抜き、女性に向けてきた。

「ヒッ：」

「そうだ、大人しくしてろよ。そうすりゃあんたの綺麗な顔に傷付ける事はないからな」

顔の方に刃物をチラつかせて固まる女性にゆっくりと言い含めるように言い放つ男たち。

女性はその言葉に顔を青褪めさせた。

どこかのドラマでも見てるみたいなりとりだけど、離れて見てる私にも緊迫した状況が痛いほどよく分かる。：現実だ、これは。

「：どう、しよう」

震える小さい情けない声をつぶやく私。

実際、私に何が出来なのか。見過ごしたらあの女性は最悪、殺されるかもしれない。

なんとかして助けたいけど…。

？自分がおとりになって女性を逃がす。

：ダメだ、怖すぎる。捕まったら私が殺される。却下。

？近くの小石とかをたくさん拾って男たちに攻撃。その隙に女性を逃がして私も逃げる。

：石ごときで男たちが怯んでくれるのか大きく疑問。逃げ遅れたら私も女性も殺されるかも。却下。

？このまま見過ごす。

：一番寝覚めが悪い、かも。もしこのまま見過ごして私だけコッソリ逃げたらあの女性は間違いなくタダではすまないんだろうな。かといって、私に何が出来るかというところ（以下略）

：ああ、ロクな考えが浮かばない。

私があーだこーだと悩んでいるうちに、囚われの女性とバッチリと目が合った。

「あ…」

どっちが呟いた言葉だろう。そんな事はすぐにどうでも良くなっていた。

「ちょ、ちょっとあなた！見てないでこの状況をなんとかしなさいよ！！助けなさいよー！！」

「なんだと！？どこにいる！」

「あ、ザギのアニキ！あそこに人が！見られましたぜ」

三人三様。私に向かって叫んだ女性と、この状況を見られた事に焦る男たち。

そして見つかった事で頭の中が真っ白になって動けない私。行動に移したのは男たちの方だった。

「捕まえろ!!」

ザギと呼ばれていた灰色がかった赤髪の男が茶髪の男に命令する。その言葉に即座に反応して茶髪の男が私に向かって近づいてきた。

「…っ！」

恐怖で動けない私を茶髪の男はいつも簡単に捕まえる。

腕を捕られて強引にザギと呼ばれる人のところに引きずられて行く。う、腕が痛い。

剣先はピタリと私の首筋の方に向けられている。こ、これって絶体絶命というヤツではないだろうか。

「よう、お嬢ちゃん。不運だったな。俺たちに見つかってしまった」

ニヤニヤしながら余裕たっぷりに私に話しかけてくるザギという男。剣先なんて生まれて今まで向けられた事もないし、この状況にまだ全然付いていけない私は固まって反応も出来てない。

そんな私を見て恐怖を感じてるんだろうと勝手に解釈したらしい男たちは余裕の笑みで話し出した。

…ま、まあ実際恐怖感じまくってそのものズバリ、だから反論もしないけれど。…情けない。

「どうします、アニキ？こいつも連れていきますか？それとも…ここをやっちまいますか」

「…っ」

「まあ、こういう感じが好きなオヤジもいるにはいるからな。一応商品として連れて行くか」

…え。

え、え、…ちょ、待って。待って待って。さっきのセリフってどういう意味？

こういう感じが好きなオヤジ…とか商品、とかって…。

男たちは私の前髪を掴んで顔を覗き込んでくる。ち、近づかないで。嫌だ、怖…。

「…へえ」

「これはなかなか…じゃないですかい」

無駄に長い前髪に隠れて見えづらかった私の眼を晒して顔をジロジロ見てくる。

ザギという男は片手で女性を捕まえておいて、もう片方の手で私の前髪を掴んでいる。力が強いので髪が引っ張られてすごく痛い。

半分涙目になりながら、それでも声は上げない私。…声が出なかったってだけなんですけど。

「それにしても変わった格好だな。どこの国の者だ？」

「…さあ。エマトリアでは見ない服ですよね」

知らない地名が聞こえた、ような気がする。けどゆっくり考えるような余裕は今の私にはもちろんない。

どうしてこうなった。なんでここにいるの、私。ワケ分からない。

その時、急に後ろからドン、と押された。押された私は二人の男たちに押しかかる形になる。

うわあ、とかうおっ！とか声を上げながら軽く不意打ち気味になつて倒れる私と男たち。あ、危なっ！剣先を私に向けていたので危う

く首筋が剣に刺さる所だった。ザギが咄嗟に剣を引いたから傷つかなかったけれど。そんな不意打ちをしたのは囚われの女性だった。その隙を狙ってか、女性がザギの手から離れていた。

「あ、てめえ！」

手は相変わらず組みたいなもので拘束されているけど、足は歩かせる為か自由だった。

女性はザギの手から逃れれば後は走り出すだけ。

…って、あの女性、今私をおとりにして逃げたよ。

「…ちっ」

ザギは素早く立ち上がり私を茶髪の男に託すと女性を追って走っていく。

といっても、所詮は男と女の差なのか。それとも見るからにお嬢様の逃げ足だったからかあっさりと捕まっていた。

「…っ離してよ！」

「まったく、同じことを何回もさせるんじゃないやねえよ、お嬢様。…しようにねえな」

ドス、という音が聞こえた。そちらに恐る恐る目をやると、グツタリと気絶する女性とその人を担いでいるザギの姿が。ザギはやれやれ、という感じで大きくため息をつく。

「まったく、余計な体力使いたくないから歩かせたってーのに。結局担いで行くのかよ」

「コイツはどうします？」

「ああ」

そうだな、という呟きが聞こえたかと思うとお腹に鈍い痛みが届いた。

何も言葉を発せないまま、私も意識をなくしてしまった。

ほら、何の役にも立たなかったでしょ。情けない事に予想通り。トホホ…。

ああ、これからどうなるの…私。

いきなりピンチ…です。(後書き)

チキンすぎる主人公ですみません。

あまり話進んでないような…。次辺りで騎士様出せたら良いなあ。

物語のような展開にビックリです。

「役立たず」

意識が戻って女性…もといお嬢様（服装から見てもお嬢様っぽいし、あの男たちもお嬢様と言ってたしお嬢様でいいや）と目が合った瞬間、開口一番にそう言われました。

ええー…と、自分でもそう思ったけども、人から言われるとかなりキツイですよ…。凹。

気が付くと鉄格子の柵に囲まれた薄暗くて狭い場所にお嬢様と二人、寝かされていた。

人はそこを牢屋と呼ぶ。

見張りはいない。牢屋の扉にはしっかりと鍵がかかっているのを見張りがいなくても逃げられないからだろう。

おまけに私とお嬢様の手と足には縄の拘束がキツクされている。これでは牢屋に鍵がかかっていなくても逃げられない。少なくとも私は逃げられる自信がない。断言できる。

「まったく…なんで私がこんな目に」

ブツクサとなおも文句を言い募るお嬢様。

こんな所に入れられても強気の姿勢を崩さないお嬢様はこうやって見ると本当に美人さんだ。

キツめの目元をもう少し柔らかくしたら好感が持てると思う。

「護衛の奴等は何をしてたんだ」とか「ここから出たら即刻クビ」などヒドイ事を呟いているお嬢様の手元は私が見ても分かるくらいに震えている。

：そうだよね、こんなところにワケ分らないうちに連れられて怖くないなんて事はない。

「…あの」

「話しかけないでっアンタと馴れ合うつもりはないの」

ピシヤリ、と。話しかける隙を与えてもらえなかった。

…。

いや、まあ別に私も仲良くしたいなんて思っていないんだけど。

アンタって：お嬢様らしからぬ言葉だなあ。

でも、でもね、私もこの状況に全然付いていけてなかったりするから少しでも知りたいと思うんだ。

少し震えてたお嬢様が心配になったけど、文句を返せるくらいだからまだ大丈夫：かな。

だから、自己紹介と自分の状況をお嬢様に話してみる事に決めた。何か話さないと恐怖で潰されそうになっていたから。：泣きそうだ。

「わ、私、姫宮柚っていいいます。」

「：」

「東京に住んでるんですが、気づいたらあの森にいたんです」

「：」

「情けない事に帰り道が分からなくて：森の中を彷徨っていたら貴方とあの男たちに会ったんです」

「：」

「ワケ分らないうちにこんな状況になってしまっ：あの、どう

にかしてここから出て誰か助けを…」

「無理よ」

え…。

しばらくお嬢様の口が動かないのを気にしないでゆっくり自分の言葉と並べていったら、不意に呟かれた。

「こうなってしまったら逃げ出すのは無理よ。人買いの手に落ちてしまったから」

「え…人、買い？」

「…アンタも噂くらいは聞いてるでしょ。最近エマトリアで頻繁に神隠しに遭ってる事件。私みたいな見目麗しい女性が忽然と姿を消して行方不明。でも実際はどこかの黒組織に売られてるってのがオチ」

「は…はあ」

…自分の容姿を強調するところはさすがだ、お嬢様。

さっきまでしばらく口を開いてもらえなかったのに、この状況を思い出して恐怖を振り払うかのように喋り出した。

「エマトリアの騎士団もこの事件を調べてある程度のことまでは突き止めたみたいだけれど…これを見る限り元はまだ断たれていない」

「…」

「人買いをまとめているボスがよほど狡猾なんでしょうね」

えっと…現代に似つかわしくない単語がポンポンと出てきた。

人買いとか神隠しとか騎士団???…黒組織ってアレじゃないよね。

暴力団関係者とか…違うっぽい。

それにエマトリアとか、私が気を失う前に聞いた名前だ。そんな国なんだか地名なんだかは聞いた事ない。

地理に詳しいわけじゃないけど、なんだかお嬢様の口調からみても結構有名なところらしいし。

「あの…エマトリアというのは東京からどのくらい離れているところなんですか？」

「はあ！？アンタどんな田舎から来たの…」

ドッゴー…ン！！

突然、離れたところから爆音が聞こえてきた。

相当大きかったのか、ここでも天井からパラパラと砂が落ちてきていた。

その爆音を皮切りに周りが騒がしくなってきた。扉の向こうからワーワーと男たちの怒声だったり悲鳴だったり、時には剣戟が聞こえてきたりと何かが起こってるのは明らかだ。

「な…何」

何が始まってるのかさっぱり分からない私たちは牢屋の中でしばし固まる。

と、突然ボタン！とこの部屋の扉が開け放たれた。

開けた人物は髪が青くて片目に眼帯をした太った男だった。

あのザギとかいう男とかと同じような格好をしている。人買いの一味だろう。

手には剣がすでに抜かれていてかなり急いでここに来たのか、ハアハアと息切れをしている。

「な…」

「出る！クソッ早くしろ！！」

眼帯男は素早く牢屋の扉の鍵を開けると出るように促した。

といっても、私たちは手足を拘束されている為に上手く歩くことも出来ない。モタモタしている内に眼帯男がいきなり私とお嬢様の腕を掴んで牢屋から無理やりズルズルと引きずるように連れ出した。

「ちょ…痛いっ」

「グズグズするな！クソッなんでここがバレたんだよ…！」

ブツブツと恨み事を呟いている眼帯男には余裕がない。

あぐく、二人を連れ出すのは厳しいと感じたのか私を地面に強く放った。…ヒドイ。

「…っ」

体を地面に強か打ちつけてしまった私。

「ちよっとなっ私だけどうするつもり！」

「うるせえ！お前さえいれば今回の取引は上手くいく。そっちの女は捨てる」

お嬢様がなんとか男の手から逃れようとするけれどやっぱり無理で。私はこの騒動で切り離してくれたみたいだけど、そもそも目的はお嬢様のようなだから眼帯男はお嬢様だけは諦めるつもりはないようだ。

「…ザギの野郎はどこに行きやがった…クソ…クソッここを逃げ切れたら…」

「どこに…逃げるのですか？」

私とお嬢様や眼帯男とは別の声が入ってきた。

穏やかそうな口調ではあるけれど、眼帯男はその声を聞いた途端に小さく口からヒツ…と引きつるような声を上げる。

ゆっくりと部屋に入ってきたのは若い男の人だった。

白銀の鎧をしていて銀髪のサラサラとした髪に青い眼。どのような言葉が当てはまるのか分からないけれど、とてもキレイな男の人だった。

こんな状況になっているのにそれを一瞬忘れて見惚れてしまうくらいに衝撃的。お嬢様なんかは眼にハートマークが浮かんでいる。

「…チッ」

「あなたが最後です。ですが、先ほどの言葉から仲間はまだいるようですね」

眼帯男とその男に囚われているお嬢様に向かってゆっくりと近づいていく銀髪の男の人。

「まあその調査は後ほどしますが…まずはナタリア伯爵令嬢を離してもらいましょうか」

まるで物語のような展開。

囚われたお姫様を助け出す王子様のような場面。通行人1の私は当然見てるだけ。…まあ地面に横倒れているので何も出来ないのは言わずもがな…。

「く…来るな!」

完全に怯えている眼帯男はお嬢様を盾に近づいてくる銀髪の男の人を牽制しようとする。が、それに動揺する素振りは銀髪の男の人には見えない。

「あまり時間は掛けたくありません」

そう言うとき眼帯男の方からパチッと火花のような音が爆ぜた。

ぎゃっ!と驚きの声を上げ、捕らえていたお嬢様を手放してしまっている。

そこからは早かった。

眼帯男がしまった、と思う間もなく銀髪の男の人の手によって倒れ伏した。

私が気づいたのは助け出したお嬢様を守るような形で銀髪の男の人が立っている所だけだ。どうやって助けたのかはよく分からない。いきなり眼帯男がお嬢様を手放したようにしか見えなかったから。

「ク…」

「終わりです」

「隊長!」

更に2人の男の人が入ってきた。

白銀の鎧の人たちだからこの銀髪の男の人の仲間だろう。その2人のうちの一人が眼帯男を捕らえる。

「ここにいる奴等はすべて捕らえました。」

「ごくろう様です。しかし、私達が来る前にここから逃げた者がいるようです。その者から後で聞き出してください」

「了解です」

「それと、ナタリア伯爵令嬢の保護を。丁重に屋敷に送って差し上げてください」

この騒動から言葉数が少なくなっていたお嬢様はその言葉にハツとする。

…もしかして、今まで銀髪の男の人に見惚れてたわけではないよね…？

「あ、私…」

「ご無事で何よりです。パウリー伯爵が心配なさっていました。屋敷まで部下がお送り致しますのでここからはご安心ください」

「お父様が…」

銀髪の男の人はニコリとお嬢様…ナタリア嬢に向けて安心させるような柔らかい笑みで言葉を告げた。

それに対して顔を真っ赤にして応えるナタリア嬢。

手足の拘束を外してもらって部下に連れられて出て行くときもチラチラと振り返り、銀髪の男の人を名残惜しげに見ながら去っていく。もう一人の部下も眼帯男を拘束した後連れて出て行った。

なにはともあれ、これで助かった…のかな？

2人の部下の人たちがこの部屋から出て行くと、残ったのは横倒れ

に倒れた私とその銀髪の男の人だけ。

銀髪の男の人は私の方に向いて心配そうな顔を向ける。

目と目が合って、気恥ずかしい。ほんのり顔が赤くなったのを意識した。

しかしながら今回助かったけど、現状何も変わってないんだよね…。
私は一体どこにいるの…。

物語のような展開にビックリです。(後書き)

名前が出てこない…。文章って難しい。

背いていた事実に向き直りましょう。

あのように助けられてから、銀髪の男の人は私に対してもすごく親切だった。

手足の拘束を解いてもらって、氣遣わしげにゆっくりと立たせてもらう。

地面に打ち付けたときはすごく痛かったけれど、体の方は大丈夫みたいだ。

「大丈夫ですか？」

「：はい」

：とてもじゃないけどこんなキレイな男の人とともに会話なんか出来ない。

受け答えだけでいっぱいになってる私はもう目も合わせられない。

ここに連れて来られてから、服はボロボロだし髪もボサボサ。埃かぶったかのように薄汚れている私にこんなにも氣遣ってもらってるなんて本当申し訳ない。

けれど：。

「あ、えっと：一人で歩けます：けど」

手を取って立たせてもらった私は、緊張と恐怖と安心と：とにかくいろんな感情がごちゃ混ぜになっている状態なので体に力が入ってこなかった。

なので、立ったときに体はふらつき結局銀髪の男の人に支えてもら

う形になった。うう…説得力なしだ。
…わざとじゃない。

「どうかお気になさらずに」

ニコリと、私に向けて微笑んでくる銀髪の人。
うわぁ、うわぁ恥ずかしい！彼ではなくて私がつ。

「す、すみません…」と小さく謝罪して支えてもらってる腕からな
るべく離れようとする私。

だ、だって薄汚れているのに…この人までも汚れてしまうのがやっ
ぱり申し訳なくて。

なんとか一人でも歩いていけそうだし。逆にずっと支えてもらって
たら緊張で何も考えられなくなりそう…。

すると、ふう…と小さくため息をこぼす銀髪の人。

…呆れさせてしまっただろうか。親切を無視する行為をしてしまっ
て。

「少し、失礼します」

「へ…？えええ…！」

フワリと体が宙に浮く感覚がした。

銀髪の方は私の背中とひざ裏に腕を回して、自分の方に引き寄せな
がら抱き上げていた。…って、これって俗に言うお姫様抱き…ゲフ
ンツ。

「あ、あの…！」

降ろしてください、と言おうと口を開きかけたけれど、笑顔で黙殺
された。あの自然な動作は手馴れた感じがする。

気にしないでくださいとでも言ってるような柔らかい完璧な笑みを浮かべてるよ……。でも……こ、こんな羞恥は私が耐えられないっ。なんとか降ろしてもらえるように嫌がり感を出しながら体をよじったりしたけど全然ダメで。しっかりと抱えなおされました……。絶対顔は真っ赤だ、と熱くなってる頬を手でおさえて俯く私。そんな事は気にせずに銀髪の人サラリと「そう言えばお名前を伺ってませんでした」と私に言ってきた。

「私はエマトリア騎士団所属のナイツ・アウシュタットと申します」
一応隊長に就かせていただいています、と丁寧の名乗ってくれた。

「姫宮柚です。あ……柚が名前です」

銀髪の人……もといナイツさんは俯き気味の私のボソボソ呟いた言葉に「ユズさんですね」と微笑みながら応えてくれた。

それにしてもまた出たよ……エマトリア。騎士団。私には馴染みのない単語。

……うん。もう薄々は分かってるんだよ、私。

途中からあれ、これっておかしいなとか思っ、現実では起こりえない事とか実際に目の当たりにしてしまっ、でもそれでも信じたくなって。

別にいつもの日常であってほしいなんて願ってはいなかったけれど。

けどこれはあまりにも現実離れすぎていて私の許容量を大幅に超えていて思考が上手く付いていこうとしてくれなくて。それでも小説なんかでこんな展開になってる主人公がいろんな事を乗り越えて成長していく、なんてストーリーに心当たりがある自分がいて。

でもまさか私がそれに直面してしまうなんて思いもしてなかったよ。

異質だったのはナタリア嬢や人買いの男たちやナイツさんや、この世界じゃなかった。

私がこの世界で異質なんだ。

「…さん、ユズさん？」

「あ…」

大丈夫ですか、とか気分が悪いのですか、とか心配そうに尋ねてるナイツさんには悪いけれど、全然頭に入ってこなかった。

それでも「はい…」とか「大丈夫です」とか生返事に返せたのは自分で自分を褒めたい。

今はもうこの横抱きにされている状態に赤くなる事はない。むしろ顔は真っ赤から真っ青に変貌しているだろう。

どうしてこうなった。何が原因？

原因、という事でいうならば一つだけ心当たりがある。

それは…。

それは。

咄嗟に自分で自分の腕を掻き抱く。ちよつと焦ったようなナイツさんの顔が見えた。

けどそれを気にするほどの余裕がいまの私には無い。

体は小刻みに震えだした。ナイツさんにもそれは伝わっているだろう。ああ、また心配させてしまうかも。

ここに来る原因になった可能性がアレのせいだというのならば。

私が元に帰る可能性は…限りなくゼロ、だ。

だってあれからどうなったのか分からない。

妹の…桜の瀕死の状態を私に移し変えた後の記憶がないのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0669y/>

ことのは

2011年11月5日06時16分発行